芥川龍之介全集

第一卷

芥川龍之介全集 第一卷　第一回配本（全十二卷）

一九七七年七月十三日　發行©

定價三二〇〇圓

著　者　芥川龍之介

發行者　岩波雄二郎

發行所　〒101 東京都千代田區一ツ橋二ノ五ノ五
株式會社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六ノ二六二四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

バルタザアル　三
「バルタザアル」の序　二四
大川の水　二六
「ケルトの薄明」より　三二
未來創刊號　三九
老年　四一
春の心臓　四七
青年と死と　五五
クラリモンド　六六
ひよつとこ　一一二

松江印象記　一二二
羅生門　一二七
松浦一氏の「文學の本質」に就いて　一三七
鼻　一四〇
編輯後に　一五〇
孤獨地獄　一五一
父　一五六
虱　一六三
酒　蟲　一七一
翡　翠　一八三
校正後に　一八五
仙　人　一八六
薄雪双紙　一九五
野呂松人形　一九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芋粥　二〇三
猿　二二七
創作　二三六
校正後に　二四〇
手巾　二四二
出帆　二五五
ジアン、クリストフ　二六〇
煙管　二六二
煙草と悪魔　二七五
駒形より　二八七
藤娘　二八九
校正の后に　二九〇
MENSURA ZOILI　二九二
代表歌選　三〇〇

微　明　三〇一
校正の后に　三〇二
尾形了齋覺え書　三〇四
運　三一〇
道祖問答　三二三
新春文壇の印象　三二八
忠　義　三二九
貉　三五二
葬儀記　三五六
偸　盗　三六三
さまよへる猶太人　四四五
私と創作　四五六
産　屋　四五九
蚊帳の中の蚊　四六一

私の文壇に出るまで　四六二
軍艦金剛航海記　四六五
二つの手紙　四七六
後記　四九五

小說隨筆 一

バルタザアル

——Anatole France——

一

其頃はギリシア人にサラシンとよばれたバルタザアルがエチオピアを治めてゐた。バルタザアルは色こそ黑いが、目鼻立の整つた男であつた。其上又正直なたましひと大樣な心とを持つた男であつた。

卽位の第三年行年二十二の時に王は國を出て、シバの女王バルキス聘問の途に上つた。

追隨するのは魔法師のセムボビチスと宦官のメンケラとである。行列の中には七十五頭の駱駝がゐて、それが皆肉桂、沒藥、砂金、象牙などを負うてゐるのである。

みちみち、セムボビチスが王に遊星の力や寶石の德を敎へたり、メンケラが尊い祕文の歌を謠つて聞かせたりする。けれども王は餘りそんな物には氣を止めない。其代り沙漠のはてにちやんと坐つて耳を立ててゐるジャツカルと云ふ獸を見て面白がつてゐるのである。

十二日の旅が了ると、漸く薔薇のにほひがし始めた。それからぢきに、シバの市をめぐつてゐる庭園

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が見え出した。一行は通りすがりに、花ざかりの柘榴の木の下で若い女が大ぜい踊つてゐるのに遇つた。

『踊は祈禱ぢや』と魔法師のセムボビチスが云ふ。

『あのをな子どもはよい價に賣れるわ』と宦官のメンケラが云ふ。

市へはひると、倉庫と工場とが何處迄もつづいてゐる。其中には又無量の商品が山の如く積んである。之が先づ一行の眼を驚かした。

それから長い間市を歩いた。市は路車や搬夫や驢馬や驢馬追ひで埋められてゐるのである。すると眼界が急に開けて、バルキスの王宮の大理石の壁と紫の帟幕と金の圓天井とが一行の眼の前に現れた。

シバの女王は一行を庭上に迎へた。香水の噴きあげが涼を搖つてゐる。噴きあげは眞珠の雨のやうなうつくしい音を立てて滴るのである。

ほほゑみながら、女王は一行の前に立つた。寶石をちりばめた長い袍を着てゐる。

バルタザアルは女王を見ると何うしたらいいかわからなくなつた。女王が「夢」よりも愛らしく、「望」よりもうつくしく見えたのである。

『陛下、女王と都合のよい商業上の條約を結ぶのを御忘れなさいますな』とセムボビチスが小聲で云ふ。

『陛下、御氣をつけなさいませ。女王は魔法を使うて男の愛を得るのぢやと云ふ事でございます』とメンケラがつけ加へた。

それから魔法師と宦官とは伏拜をして退出した。

バルタザアルはバルキスと差向ひになつたので何か云はうと思つた。そこで口を開いて見たが一言も出ない。王は『默つてゐたら女王は怒るだらう』と思つた。

けれども女王は未だほほゑんでゐる。怒つて居る氣色は少しもない。先へ口をきつたのは女王である。聲は最も微妙な音樂よりも更に微妙であつた。

『よくいらつしやいました。わたくしの側へお坐り遊ばせ』女王は白い光の様な、しなやかな指で、地に鋪いてある紫の褥を指ざすのである。バルタザアルは坐つて、長いため息をついて、それから兩手で褥をつかみながら、慌ててかう云つた。

『陛下、寡人はこの二の褥が、あなたに仇をする二人の巨人であればよいと思ふ。寡人は即座に其頸を扭切つて御眼にかけたい。』

かう云ひながら、王は力任せに兩手で褥を摑んだ。柔な布が音を立てて裂けると、雪のやうに白い羽毛が中から雲の如く飛び立つた。小さな羽が一つしばらく空にたゆたひながら、女王の胸の上に落ちた。

『バルタザアル陛下。陛下は何故巨人を殺さうと御意遊ばしますの』顏を赤めながら、バルキスが云つた。

『寡人はあなたを愛してゐるからです。』

『陛下のお出でになる市の井戸にはよい水がございますか。お教へ下さいましな。』

『左様』バルタザアルは少し驚いた。

『わたくしは、それから、エチオピアではどうして果物の砂糖漬を拵へるのだか知りたくて仕方がございませんの。』

王は何と答へていいかわからない。

『ようお教へ下さいましよ。よう』と女王はせがむのである。

そこで王は畢生の記憶力を絞つて、エチオピアの料理人が榲桲(マルメロ)を蜜の中へ入れて貯へる方法を叙述しようとした。ところが女王は、碌々聞きもしないで又急に話をかへた。

『陛下、陛下は御隣邦のカンデエケの女王に戀をしていらつしやるさうでございますね。其方はわたくしより美しうございますか。謔をおつきになつては嫌でございますよ。』

『あなたより美しい？』王はバルキスの足下に身を伏せて叫んだ。『そんな事がある譯はありません。』

『さう？　それなら其方のお眼は？　其方のお口は？　其方のお色つやは？　其方のお喉は？』女王は口を絕たない。

そこでバルタザアルは兩腕を女王の方へのばしながら『寡人にあなたの頸に落ちた小さな羽を下さるなら、寡人は其代に寡人の王國の半を差上げる。あの賢いセムボビチスも宦官のメンケラも差上げる』とかう叫んだ。

けれども女王は座を立つて、冴々した笑ひ聲と共ににげて仕舞つた。魔法師と宦官とがかへつて來た

時に、王は何時になく深い物思に沈んでゐた。

『陛下、都合のよい商業上の條約をお結びになりましたか』セムボビチスはかうたづねた。

其日、バルタザアルはシバの女王と晩餐を共にして、椰子の酒を飲んだ。一緒に食事をしてゐるとバルキスが、『それではカンデエケの女王が私ほど美しくないと云ふのはほんたうでございますか』とたづねた。

『カンデエケの女王はまつ黒です』とバルタザアルが答へた。

バルキスは意味ありげにバルタザアルを見た。

『黒くつても不器量とは限りませんわ。』

『バルキス！』

王はかう叫びながら、二言と云はずに女王を抱きしめた。王の脣に壓されて、女王の頭は力なくうしろへ下がるのである。けれども王は女王が泣いてゐるのを見て、甘つたるい、小さな聲で話しかけた。乳母が乳のみ兒にものを云ふ時のやうな口調である。王は女王を『わが小さき花』と云つたり『わが小さき星』と云つたりした。

『どうして泣くのです？　泣きやむ様にするには何をしなければならないと云ふのです？　したい事があるなら仰有い。何でも聞いてあげます。』

女王は泣きやんだ。けれどもまだ思に沈んでゐる。王は長い間女王に其願を打明けてくれと願つた。

其揚句にやつと女王がかう云つた。

『わたくしは怖と云ふ事を知りたいのでございます。』

バルタザアルには解し兼ねた様に見えた。そこで女王は是迄久しい間、何か未知らぬ危險に出あひたいと思つても、シバの人民と神々とが見張つてゐるので、遇ふ事が出來ないと云ふ事を話してくれた。

『それでも』と女王が云ふ。吐息を洩しながら云ふのである。『それでも夜中、わたくしは怖の嬉しいをののきが體に通ふのを待つて居るのでございます、おそろしさに髪が逆立つのを待つてゐるのでございます。「こはがる」と云ふ事はどんなに嬉しい事でございませう。』

女王は兩手を黑い王の頸にからんで、子供のせがむ様な聲でかう云つた。

『夜がまゐります。假裝をして御一緒に市を歩きませう。おいやでございますか。』

王は同意した。女王はすぐに窓に走りよつて格子の間から下の十字街路を見下した。

『乞食が一人、王宮の壁によりかかつて横になつて居ります。あの乞食に陛下のお召しをおつかはしになつて、其代に駱駝毛の頭巾とあの男のしめてゐる苔布の帶とをお貰ひ遊ばせ。早くなさいまし。わたくしは自分で支度を致しますから。』

女王は嬉しさうに手を拍ちながら、饗宴の間を走り出た。バルタザアルは金で繡をしたリンネルの下衣を脱いで、乞食の衣を身に纏つた。どう見てもほん物の奴隷である。女王も亦たすぐに縫目のない青い衣をきて出て來た。

畑で働く女たちが着る着物である。

『さあ、まゐりませう。』

かう云つて、女王は狹い宮廊を、野へ出る小さな戸口の方へバルタザアルをひつぱつて行つた。

二

夜は暗かつた。さうして夜の暗につつまれて、バルキスが大へん小さく見えた。

女王はバルタザアルをある居酒屋へ伴れて行つた。宿無しや立ん坊が私窩子をひきずりこむ處である。二人は食卓について、いやな臭のするランプの光で不潔な空氣の中に浮き出してゐる人の皮をかぶつた汚い獸どもを見た。女一人、酒一杯の爭から拳骨とナイフとで、嚙合ひが始まる。外の奴は外の奴で、鼾をかきながら、握り拳を拵へて食卓の下に寢そべつてゐる。居酒屋の亭主は又ズツクを重ねた上に横になつて眼を光らせながら、いがみあふ醉たんぼを見張つてゐるのである。バルキスは鹽魚が天井の桷(たるき)からぶら下つてゐるのを見て、連れにかう云つた。

『わたくしは撞き葱をつけてあのおさかなを一つたべて見たうございますの。』

バルタザアルがいひつけた。けれども食べて仕舞つて見ると、王は金を持つて來るのを忘れたのに氣がついた。尤もこれは格別苦にならない。勘定を拂はず二人で拔け出すのも譯無しだと思つたからである。處が其段になると亭主が『折助め、ひきずりめ』とわめき立てて、何うしても二人を通すまいとす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com